美術手帖

第991号 2013年9月1日発行 毎月1日発行 1948年4月20日第3種郵便物認可 ISSN0029-0718 http://www.bijutu.co.jp/

ART | 2013.09
No.991 | 1500円

佐藤健さんとめぐる
瀬戸内海の島々
あいちトリエンナーレ

フランシス・アリス
Artist Interview
ミン・ウォン

これから
行きたい!
全国おすすめ
アートサイト
ガイド

この夏・秋に体感したい

特集 アートの旅へ
でかけよう!

丸ごとリポート! 瀬戸内国際芸術祭

不確定な未来を生きるための情報

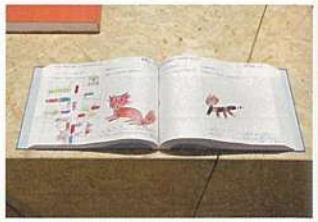
「セカイがハンテンし、テイク」展

藪前知子　評

この魅力的な展覧会タイトルは、水無田気流（みなしたきりゅう）の詩「電球体」から取られている。「技術とメディア」に視点を置いてきた川崎市市民ミュージアムの25周年記念展である本展は、「コンピューターとインターネットが普及した現在の社会でのコミュニケーションのありようを考える」ことをテーマとして掲げる。「セカイ」というカタカナ言葉が、世界を制御可能なものとする自意識と想像力の出現を指しつつサブカルチャー批評で喧伝される直前に、現象のただなかから発された詩人の言葉は、いまだ当時と変わらぬ磁力を放っているが、それからすでに10年の月日が経っている。上記のテーマはすでにメディア・アートというジャンルが定着するまでに取り上げられてきたし、クリシェともいえるステイトメントからどのような「現在」が分節化されるのか、いささかの懸念も感じつつ訪れたが、展示レイアウトなどに気になる点はあったものの、内容としてはその思いを裏切る興味深い企画であった。

上記のテーマに直接応答しているように見えたのは、唯一の外国人作家であり、アートイベント「BYOB（Bring Your Own Beamer）」の発起人として知られるラファエル・ローゼンダールの、コンピューター統御がもたらす身体感覚を抽出する作品のみであり、そのほかの日本の若手作家たちの作品の印象は、デジタル時代のリアリティーというテーマからは乖離しているように見える。こちらの知らない「誰か」についてのタクシー運転手たちの語りを繋げた中村土光の映像作品や、物語の断片を動きの速度を変えて3面スクリーンに並置し、そのタイムラグによって引き起こされる悲喜劇の可能性を「事故」として捉え、そこにコミュニケーションの本質を見出す冨永昌敬／土田環など、意味伝達の不確実性や、その過程で発生するノイズを可視化する作品が並ぶ。

中村土光　誰かのドライブインシアター2013　2013　インスタレーション（遺遥展示空間）、映像、タクシー、スクリーン、プロジェクター、FMトランスミッター　サイズ可変（映像は2時間7分10秒）



藤村豪&内野清香　猫は歩き、私たちは出会う　2013
左――展示風景。作家が市内約7万人の小学生に宛てた、身近にいる猫の情報提供を呼びかけた手紙や、それを受けて小学生が返信した手紙、ワークショップ「同じ猫をみんなで大きく描けるかな？」などの記録映像とその成果が展示された
右――小学生による返信の手紙

情報を繋ぐ網がここまで複雑にはりめぐらされた現代において、ディスコミュニケーションを前提とする場所からしかリアリティーを紡げないという主張は特段新しいものではないが、会場を巡るうちに、それらの作品が、私たちを取り巻くメディアの構造を体現したものとして現れてくる。「情報とは差異である」というグレゴリー・ベイトソンの古典的な指摘が脳裏に浮かぶ。異なる世界が重なる時、既存の境界が揺るがされる時、そこに情報が生まれる。そもそも情報とは未知なるものが持つ不確実性を埋めるためのものであろう。中村作品の運転手たちの語りが、いつの間にか一人の「誰か」についてのように聞こえる、あるいは冨永／土田作品のちぐはぐな場面の連続が、多方向への可能性を秘めたひとつの現実として認識される、そうした現象――「セカイのハンテン」――が起こるのは、複数の異なるものの間で共通の意味が発生し、ひとつの秩

ケータイアート情報サイト
アート・ナビ
美術館を持ち歩く!!
手軽に探せるアート情報サイト。
いつでも全国の展覧会情報を簡単検索!!
有料会員：月額315円（税込）
アクセス方法
【imode】＞メニューリスト＞待受画面＞アート＞アート・ナビ
【ezweb】＞au oneトップ＞カテゴリ（メニューリスト）＞待受・画像＞風景・アート＞アート・ナビ
【Yahoo!ケータイ】＞メニューリスト＞壁紙・きせかえアレンジ＞アート・フォト・写メール＞アート・フォト＞アート・ナビ

安西剛　Useful Days（映像スチル）2013　インスタレーション（博物館展示室）、映像、日用品、モーター、スピーカー　サイズ可変（映像は各5分）

序が生み出されるからだ。これらの作品が提示する、語りと語りの間で絶えず形を変える情報発生のあり方は、ネットワークが構築されるプロセスを仮構していると言えるだろう。また、川崎市内の小学生に街で出会う身近な猫の情報提供を呼びかけ、集まったおよそ8000人分の内容から、同じ猫に出会っていると思われる子どもをグループ分けしたり、彼らと一緒にその猫の姿をつくったりする藤村豪&内野清香の作品も、情報の不確かさがもたらす、互いを補完し合うような共同性――ネットワーク社会のモデルとして読むことができるだろう。

一方、遠い未来など、異なる文脈を持つ世界で、もとの意味を奪われた「機械」に思いを巡らす安西剛の作品は、古くなったメディアは芸術形式として生き延びるというマーシャル・マクルーハンの指摘を想起させる。博物館展示コーナーの過去の複数の時間軸の中に、同じ機械が展示され、その都度違う意味が語られる。この作品が興味深いのは、メディアの存在が、それに関わる「私」のありようを可視化するという「ハンテン」を起こすことである。諸力の関わりの中で、「私」は世界と同時に生起する。本展の英語タイトルが、水無田自身によってマルティン・ハイデガーの「世界内存在」を下敷きにつけられたという事実も付記したい。新しい情報が次々に発生する動的なネットワークの中で、「私」と他者との境界線は常に揺らぎ、更新される。この感覚を捉えた本展を、東日本大震災以降アートの領域で多発するオフラインでの他者との協働が、時に変化の枠組みが予め想定されている共同性にしか届かない事実に対比することもできるだろう。私たちそれぞれが確率論的に不確定な未来を抱え、情報に対する態度がこれまで以上に問われる現在の状況下で、本展が照らす射程の大きさを思う。

PROFILE
やぶまえ・ともこ　東京都現代美術館学芸員。現在企画担当した「MOTコレクション　私たちの90年 1923-2013／ぼくからきみへ――ちかくてとおいたび」が開催中（9月8日まで）。

セカイがハンテンし、テイク

川崎市市民ミュージアム

7月20日〜9月29日

1988年に開館し、今年開館25周年を迎えた川崎市市民ミュージアム。本展はメディアと芸術の関係に注目してきた同館ならではの視点で、現代のコミュニケーションツールやメディアが変えた生活観、芸術観、他人との距離、世界との距離感をテーマに企画。英語タイトルは「Being-in-the-Wired-World」。aricoco、安西剛、北上伸江、髙田安規子・政子、冨永昌敬／土田環、中村土光、藤村豪&内野清香、ラファエル・ローゼンダールの国内外の若手作家8組が出品。チーフキュレーターは同館美術部門学芸員の金澤韻（こだま）。